

## ⑬ 里山の植物

一昔前まで、里山の二次林は薪炭林として人間の生活になくてはならないものでした。そのため丘陵地の人里のまわりには、二次林が広く分布していました。人々は適当な間隔で林を伐採して利用し、伐採後に切り株から出てくる萌芽を大切に育て、林を維持してきました。林の中は落ち葉かき、下草刈りが行われ、いつも明るい状態でした。愛知県の場合は、丘陵地の土地が痩せているため、何回か伐採を繰り返すと、もう樹木が育たないということもあったようです。そうなると丘陵地は、細いアカマツがぼつぼつと生えている他はほとんど樹木のない、やせ山状態になってしまいました。このやせ山状態をどうやってなくすかが、愛知県の森林行政の最大の課題でした。ところが、一生懸命造林する人がいる一方で、それがあつた程度育つと、目を盗んで伐採する人が出る。そのようなわけでやせ山状態は、昭和 30 年代まで、なかなか解消されませんでした。

しかし、燃料革命によって一般家庭に化石燃料が普及するにつれ、薪炭林は不要なものとなりました。いらなくなった林は放棄され、伐採も手入れもされなくなりました。放棄された林の中には常緑樹が芽生え、生長し、照葉樹林化が進行しています。

照葉樹林化は林が本来の自然植生に遷移していく過程ですから、自然度の向上と言えばその通りで、ある意味では望ましい現象です。しかし、二次林の明るい林床を生活の場としてきた生物にとっては深刻な脅威です。彼等は、原始的な自然の中ではどこかに生活の場を持っていたはずですが、その場所が人間の改変によって消失する過程で二次林の林床に逃げ込み、新たな生活の場を見つけて今日まで生き延びてきたのだと思います。ですから、遷移は自然現象だから仕方ないというのは、前項の湿地の植物の場合と同様、彼等にとってすいぶん酷な話です。

経済的に不要になった里山二次林を全面的に維持するのは、現実問題として不可能です。林床の手入れにしても、昔は 1 人で手早く行い、一度誰かが入ったところには次の人は入らなかったものですが、市民活動などで慣れない人が大勢入ると林床の踏み荒らしなどの被害が深刻になり、しばしばかえって逆効果になってしまいます。一部の場所については伐採を行い若齢二次林を維持する一方で、大部分の場所については老齢広葉樹林を目指すか、照葉樹林化を見守るほかありません。まずはいくつかの指標種について分布の現状を把握し、それをもとに、どの方向で管理するか施策を考える必要があります。今回は、先駆種としてアカマツ、典型的な二次林の構成樹種としてアベマキ、林床植物としてミカワツツジ、やせ山二次林の構成種としてフトミズナラ、照葉樹林化の指標としてクロバイとエンシュウムヨウランを取り上げます。



(犬山市, 1994-5-17, 芹沢俊介)

樹皮は  
赤褐色

(名古屋市, 2018-9-20, 星野智司)

## アカマツ 裸子植物 マツ科

*Pinus densiflora* Siebold et Zucc.

むかし やま  
昔のマツ山今いすこ

### 【形態】

高さ 30m、直径 1m に達する常緑の針葉樹。樹皮は赤褐色で、亀甲状に割れる。冬芽の鱗片は赤褐色。葉は 2 本ずつつき、長さ 7~10cm、幅 1mm 程度である。花期は 4 月下旬~5 月、雄花は新枝の基部に多数つき、雌花は新枝の先端に 2~3 個つく。毬果は咲いた翌年の秋に熟し、長さ 4~5cm、直径約 3cm である。

### 【分布と生態】

北海道南部~九州、朝鮮半島、中国東北部に分布し、愛知県では山地~丘陵地に生育しているが、平野部にはない。

### 【よく似た種】

クロマツは海岸性の種類で、樹皮は灰黒色、冬芽の鱗片は白色、枝は太く、葉も太くて硬い。東海道の松並木はクロマツである。

### 【撮影のポイント】

マツ林の調査が目的なので、右の写真のように木全体を写してほしい。

愛知県の丘陵地は、一昔前まで、アカマツの天下でした。アカマツは樹脂が多く火力が強いので、窯業の燃料としてよく利用されたのですが、伐られたってそのくらいではへこたれない。次々と若いマツが生えてきました。しかし、マツは陽樹で、若木は日当たりのよい場所でしか育つことができません。里山の森林化が進むにつれて、松林の更新は次第に困難になりました。それに加えて、マツノザイセンチュウによるマツ枯れ。昔はどこにでもあったアカマツの林ですが、今どのくらい残っているか、調べてみてください。



葉の裏は  
灰白色



樹皮は  
コルク状

(刈谷市, 1999-10-13, 芹沢俊介)

(岡崎市, 2018-9-28, 星野智司)

## アベマキ 真正双子葉類 ブナ科

*Quercus variabilis* Blume

さとやま そうきはやし おうさま  
里山の雑木林の王様

### 【形態】

高さ 15m、直径 50cm に達する落葉性の高木。樹皮は縦に不規則に割れ、コルク層が発達する。葉は長さ 10~18cm、縁には先がとげ状に伸びる鋸歯があり、裏面は毛が多く灰白色になる。花期は 4 月、雄花は長さ 8~10cm の穂となって垂れ下がる。果実は咲いた翌年の秋に熟し、球形で直径 15~20mm、下側に太いひげのついた皿がある。

### 【分布と生態】

本州、四国、九州に分布し、朝鮮半島や中国大陸にもあるが、どこまでが真の自然分布かははっきりしない。

### 【よく似た種】

関東地方の里山に多いクヌギは葉裏が緑色で、愛知県でも稀に植栽される。

### 【撮影のポイント】

クヌギとの識別のためには、一部の葉でも裏側が写っているとよい。

愛知県の里山の雑木林の中で大きく立派な木は、たいていこのアベマキです。もともとはおそらくほとんどが植栽されたもので、本来の自生があったかどうかよくわからないのですが、ずっと里山の王者として君臨してきました。実は大きな丸いドングリで、コマにするとよく回ります。樹皮は厚く、第二次世界大戦中はコルクの代用にされました。

里山の雑木林で圧倒的に多いのはコナラですが、コナラは量が多すぎて、あるなし情報だけの調査には向きません。そのため調査対象としては、アベマキを取り上げます。



鋸歯は丸味を  
おびる

## フモトミズナラ

(みよし市, 1992-4-15, 芹沢俊介)

真正双子葉類 ブナ科

*Quercus crispula* Blume var. *mongolicoides* (H. Ohba) Seriz.

あいちけん きゅうりょうち とくちょうづ じゅもく  
愛知県の丘陵地を特徴付ける樹木

### 【形態】

落葉性の高木。高さ15mくらいになる。葉はほとんど無柄か長さ5mm以下の短柄があり、葉身は通常倒洋梨形、長さ12~22cm、幅5~15cm、先端は丸味を帯びて鈍頭、辺縁の鋸歯は10~15対で円~鈍頭である。花期は4月、果実はその年の初秋に熟し、広楕円形、長さ約2cm、皿表は鱗状である。新葉は黄緑色で、この時期には遠くからでも確認できる。

### 【分布と生態】

尾張中部の丘陵地の、中腹から尾根に多い。山地の一部にもある。関東地方北部にも分布している。

### 【よく似た種】

ミズナラからは、葉縁の鋸歯が鈍頭で果実が大きいことで区別できる。

### 【参考資料】

県RDB 植 p.618

愛知県の丘陵地を特徴づける樹木の一つ。温帯性のミズナラがやせた丘陵地に残存したものと考えられます。以前は「モンゴリナラ」と呼ばれていました。現在のところまだ個体数は多いのですが、生育地は全域にわたって強い開発圧にさらされており、県の準絶滅危惧種となっており、愛知県のやせた丘陵地は、点在する湧水湿地以外の場所でも本種やオキアガリネズ、ミカワツツジなど特徴的な樹木が生育しており、また森林の発達が悪いためウンヌケをはじめとする多くの草党性植物が残存しています。湿地以外の場所も保全上重要です。



花は紅紫色

調査  
テ  
ー  
マ

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

調査  
し  
や  
す  
い  
月

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1

2

## ミカワツツジ

真正双子葉類 ツツジ科

(知多市, 1996-5-20, 芹沢俊介)

*Rhododendron kaempferi* Planch. var. *mikawanum* (Makino) Makino

べにむらさきいろ はな  
紅紫色の花のヤマツツジ

### 【形態】

一部常緑性の低木。よく分枝し、高さ 0.5~1m になる。葉は長さ 1~5mm の柄があり、葉身は長楕円形、大きいもので長さ 2~4cm、幅 8~15mm、先端は鈍頭、基部も同形、辺縁は全縁、葉縁や両面に赤褐色の毛がある。花期は 4~5 月、花冠は漏斗形で 5 中裂し、直径 2.5~4cm、色は変異があるが基本的に紅紫色系で、上側内面に濃色の斑点がある。

### 【分布と生態】

愛知県のほか、岐阜県東濃地方の一部、三重県桑名市に生育している。里山の森林化に伴い、次第に減少している。

### 【よく似た種】

ヤマツツジは全体に大型で、葉も花も大きく、花は朱色である。

### 【参考資料】

県 GDB①p.288

愛知県とその周辺のやせた丘陵地に固有のヤマツツジの一型。愛知県の丘陵地(東三河西部を除く)には基準変種のヤマツツジがほとんど分布しておらず、生育しているものは大部分がミカワツツジです。花色に特徴があるので、写真を撮影するなどして、色を記録しておく必要があります。名古屋近郊だけならコバノミツバツツジの方が目立ちますが、ミツバツツジ類は全県的には似た種類が多く、その中には深山まで分布しているものもあり、しかも写真での識別が困難ですので、今回は調査の対象から除外します。

小さい花が  
穂状に集まる



(豊橋市, 1993-4-27, 芹沢俊介)

(名古屋市, 2001-1-28, 芹沢俊介)

クロバイ 真正双子葉類 ハイノキ科  
*Symplocos prunifolia* Siebold et Zucc.

えだ しろ はな  
枝いっぱい白い花

【形態】

常緑性の樹木。林内では小高木になるが、岩場などでは低木状のこともある。葉は互生し、長さ1cm程度の紫褐色を帯びる柄があり、葉身は長楕円形、長さ4~8cm、幅1.5~2.5cm、先端は鋭尖頭で鈍端、革質で表面に光沢があり、辺縁には低い鋸歯がある。側脈は目立たない。花期は4月下旬~5月中旬、花序は前年枝上部の葉腋につき、長さ2.5~7cm、花は長さ1~5mmの柄があり、花冠は5裂して白色、直径8~12mmである。

【分布と生態】

本州中南部~琉球、朝鮮半島南部、中国大陸に分布する。愛知県では低山地~丘陵地に点在する。開花するような成木と幼木は、分けて記録するとよい。

【参考資料】

県GDB①p.284

常緑性の小高木。照葉樹林の構成種ですが、岩場や風障地など、やや森林の発達が悪い場所にも生育しています。4~5月に枝いっぱい白い花をつけ、よく目立ちます。幼木は林の下層木としてあちこちに生育しています。

里山常緑樹林化の指標として取り上げる樹木としてはアラカシ、ソヨゴ、カクレミノの方が目立ちますが、これらは現在でもあちこちに生育しており、量も多いので、あるなし情報だけでは有効な調査になりません。しかし量的な変化が調べられる場合は、これらにも注目してください。

調査  
テ  
ー  
マ

①  
②  
③  
④  
⑤  
⑥  
⑦  
⑧  
⑨  
⑩  
⑪  
⑫  
⑬  
⑭  
⑮

調査  
し  
や  
す  
い  
月

3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
1  
2



花は淡褐色

(長久手市, 2013-5-23, 加藤範夫)

## エンシュウムヨウラン 単子葉類 ラン科

*Lecanorhich suginoana* (Tuyama) Seriz.

つ ゆ とき そ う き ば や し さ は な  
梅雨時の雑木林にひっそりと咲く花

葉緑素を持たない腐生のラン科植物。落ち葉の色に似ていて、しかも梅雨時に咲くため注意しないと気付きませんが、そのつもりで探せば割合あちこちに生育しています。愛知県の里山二次林を特徴づける植物の一つで、瀬戸市から名古屋市にかけては、数百株の群落も点々と見られます。しかし、愛知県ですっと植物を観察している人からは、「以前はほとんど見かけなかった」という話を聞きます。里山の森林化に伴い、近年急速に増加しているのではないかと思います。身近な場所でも新たな自生地が発見できるかもしれません。花後の果実は黒色になります。

## 【形態】

地上茎は高さ 15~30cm になる。花期は 5~6 月、花は茎の上部にややまばらに 3~7 個つき、淡褐色、筒状でほとんど開かないか斜開し、がく片と側花弁は長さ 13~18mm である。稀に花が黄色のものがあり、キバナエンシュウムヨウランと呼ばれる。

## 【分布と生態】

本州、四国、九州、台湾に分布し、愛知県では低山地~丘陵地の二次林内などに生育する。

## 【よく似た種】

愛知県のムヨウラン類としては、他にムヨウラン、ホクリクムヨウラン、ウスギムヨウラン、クロムヨウランなどが知られているが、どれもあまり多くない。

## 【撮影のポイント】

秋に果実の状態を確認されることも多い。この場合は大きさが重要なので、尺度になるものを入れて撮影してほしい。

## 【参考資料】

県 GDB①p.237